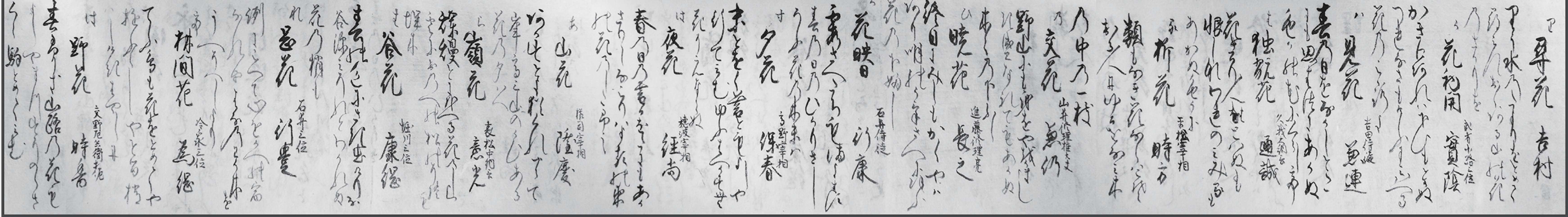


埋木文臺勸進之歌 解説と解題

福島県学芸会・あぐま流木会 松浦丹次郎 伊達伸明 美徳家 木紙鑑



大條伊達家所蔵の「名取川埋木文臺勸進之歌」(以下「勸進歌」と略記)は名取川埋木の文臺の完成披露として編まれた歌集であると考えられる。ここには歌題と和歌とその作者名が記されて...

31人の作者のうち27人は公家であり、「関白」「右大臣」「大納言」など官職名が付いている。網村吉村・宗永・兼寿の4人だけが肩書きが何もない。この4人は仙台藩主伊達綱村・伊達百村父子、伊達家一門の一閣藩主田村宗永、伊達藩お抱えの連歌師猪苗代兼寿である...

近衛基熙の歌から始まり、次々に歌を詠み継いでいき、一つの物語を完成させる。こういふ形式の歌は統歌(つぎうた)や勸進歌と呼ばれる。このような歌集は、本来一同に会して行い、始める前に参加者・順序・題を決める者が選ばれていなければならない。離れていたら、その人の指示で持ち回りになる。京の都と仙台では距離が遠すぎる。おそろこの指揮や連絡交渉の係は猪苗代兼寿が担ったような気がする。猪苗代兼寿は関白近衛基熙から「古今伝授」を受けており、十分な美力とサロンをもっていた。ところが兼寿は元禄7年(1694)5月に死去してしま...

「勸進歌」に参加している公家たちは強い縁戚関係で結ばれていた。近衛関白基熙と近衛右大臣家熙は親子。家熙の母(基熙室)は後水尾天皇の皇女常子内親王。柳菟守相隆慶の伯母隆子は後水尾天皇の側室。隆子の妹貞姫は仙台藩二代...



阿武隈川に埋もれた木で試作復元された「埋木文臺」。これも松浦氏の作。

埋木文臺勸進之歌の原本画像(黒枠部=歌集の1ページ目は本紙1面、この面は2ページ目以降の全て)、解説文(下枠)、解説文を一挙掲載する。原本については歌の区切りと関係なく改訂・改頁して書き連ねてあるため、ここでもページ割には重きを置かず、巻物状につなげてレイアウトした。

名取川夢幻、珠玉の31首

Table with 2 columns: 詩題 (Title) and 解説 (Explanation). Includes titles like 漸待花, 裁花, 草花, 花初開, etc., and their corresponding commentary.

妹、また平松宰相時方の子時香の妻は野左兵衛権佐時香の娘。交野時香の妻は山本実富の娘。石井三位行豊と石井待行は親。平松時方・交野時香・石井行豊は兄弟で、父は平松時量であった。時方の妻は裏松中納言意光の妹であった。裏松意光の子益光と穆波経尚の養子晴直は吉田待從兼連の娘を妻として居る。参加者はいずれにして朝廷の有方メンバーで豪華な顔ぶれである。伊達家はこのほか中院通射・武者小路実陰らとも付き合いがあった。

資料2 『隣松集 上 春夏』より 桜題 元禄十七春名取川埋木文臺勸進歌 埋木もは花にそつむむと川 岸根のさくら影うつるより 花鏡 (埋木) 伊達吉村 (中院通茂添削) 法橋兼都名取川埋木文臺勸進歌 けりうすいのたよりをよめて尋む 花鏡 (埋木) 伊達吉村 (近衛基熙添削) (流水) (俣り求め)

資料3 『隣松集 組題』(山口市史 資料集9所収)より 享保二十五年二月二十四 故中納言政宗御百年忌追善歌三十一首和歌(武者小路実陰添削) 立春卿以辞世和歌一字宛句上三置之 政宗卿 (後松) くら春も又とかへらぬみちやする むかしに遠く忍ぶその世は 松浦丹次郎氏 昭和26年生まれ 福島県伊達市在住。元保原歴史文化資料館委員。福島県史学会会員。あぐま流木会会員。主な著書…『伊達氏誕生』(阿武隈川の埋もれた木) 『伊達の名勝高千穂』

平安時代以降、名取川の埋木は都人たちに度々和歌に詠まれ、多くの歌が古今集などの勸進歌集に収録されてきた。それは「名取川」と「埋もれた」という言葉が「魔力のせい」と思われる。埋木は昔は川底に姿を隠していることから、その語は、人が世の中に埋もれて目立たない喻えとして、和歌の掛詞や枕詞に使用されることになった。さらに「名取川」が「評判になつて」という意味の掛詞であり、「名取川」と「埋もれた」は和歌の題材として採り入れやすいのである。 不思議なことに埋木を詠んだ歌のおよそ七割が名取川、三割が阿武隈川であった。二つの川の埋木の質が特に良かったためにも「名取川の水材」と記された。「名取川埋木」は、燃やすと赤色の灰となり、火を良く蓄える」と評判だった。香炉灰としての教習人の羨望となり、奥州からの貢物にもなった。 そこに大きな価値感を見出した伊達氏は室町時代から名取川埋木を公卿や幕府時代への献上品として活用した。伊達氏は本拠を仙台へ移してからこの献上品を続けた。埋木や埋木灰の献上の記録資料が最も多く残されているのは五代藩主伊達吉村のときである。献上先は二条家・九条家・近衛家・久我家など公卿が多いが、時には幕府家を通して禁中へ贈られたこともある。

名取川埋木と伊達家 平安時代以降、名取川の埋木は都人たちに度々和歌に詠まれ、多くの歌が古今集などの勸進歌集に収録されてきた。それは「名取川」と「埋もれた」という言葉が「魔力のせい」と思われる。埋木は昔は川底に姿を隠していることから、その語は、人が世の中に埋もれて目立たない喻えとして、和歌の掛詞や枕詞に使用されることになった。さらに「名取川」が「評判になつて」という意味の掛詞であり、「名取川」と「埋もれた」は和歌の題材として採り入れやすいのである。 不思議なことに埋木を詠んだ歌のおよそ七割が名取川、三割が阿武隈川であった。二つの川の埋木の質が特に良かったためにも「名取川の水材」と記された。「名取川埋木」は、燃やすと赤色の灰となり、火を良く蓄える」と評判だった。香炉灰としての教習人の羨望となり、奥州からの貢物にもなった。 そこに大きな価値感を見出した伊達氏は室町時代から名取川埋木を公卿や幕府時代への献上品として活用した。伊達氏は本拠を仙台へ移してからこの献上品を続けた。埋木や埋木灰の献上の記録資料が最も多く残されているのは五代藩主伊達吉村のときである。献上先は二条家・九条家・近衛家・久我家など公卿が多いが、時には幕府家を通して禁中へ贈られたこともある。

